宇野弘蔵に関する新資料の解説^{*†}

—1950-1977—

柴 崎 慎 也

前稿「宇野弘蔵に関する新資料の解説——1921-1949——」にひきつづき、本稿では1950年以降の宇野弘蔵に関する新資料について解説する。前稿と同様、本稿で扱う新資料は一部の例外をのぞき、つぎの3つの要件を満たすものに限定する。宇野自身が執筆や監修、編集委員など、なんらかのかたちで関わっていないしは関わっていると推定できること、出版社をつうじて発行・発表されていること、『宇野弘蔵著作集 別巻』（岩波書店、1974年8月）に収録の「宇野弘蔵 著作目録」に未記載であること¹⁾。したがって、ノートや草稿、書き込みのある文献、書簡などは基本的に本稿の対象外である。なお、以上の要件を満たす新資料については、以下、資料名をゴシックで表記する。

【1950年代の著作】²⁾

1947年1月に東京帝国大学社会科学研究所に嘱託として入所³⁾、1949年6月に同研究所所長に就任した宇野は⁴⁾、1950年代において主著をつぎつぎのものにしていく。1950年12月、原理論の集大成となる『経済原論 上巻』（岩波書店、下巻は1952年3月刊）を上梓⁵⁾、1953年9月には博士学位論文となる『恐慌論』（岩波書店）を発表^{6) 7)}、翌1954年12月には1930年代の宿題として残されていた帝国主義段階の全貌を著した『経済政策論』（弘文堂）を出版。ここにいたって1930年代に事実上の体系化がなされていた宇野理論は名実ともに完成をむかえた。この間^{8) 9) 10)}、1952年1月に東京大学社会科学研究所所長を辞任^{11) 12)}、1953年5月には東京大学大学院社会科学研究所科兼務となり¹³⁾、理論経済学・経済史学専門課程を担当。1958年3月に定年のため東京大学を退官したのち¹⁴⁾、同年4月、法政大学社会学部教授に就任^{15) 16)}。以後、『資本論』と社会主義』（岩波書店、1958年10月）、『マルクス経済学原理論の研究』（岩波書店、1959年6月）といった単著をものにしていった。

■統計研究会

財団法人統計研究会は、1946年夏ごろに内閣審議室に設けられた統計研究会を母体とし

て1947年10月に発足した民間の研究団体である。宇野はこの研究会の一部会である農業統計研究部に、1948年1月の立ち上げ準備会から参加している¹⁷⁾。参加当初は「研究参加者」として、1949年9月以降は農業統計研究部の「主査」として関わっているほか¹⁸⁾、1953年1月からは同研究会の「理事」を委嘱されている¹⁹⁾。農業統計研究部の設立以降に作成された資料である『農業統計研究部資料(1)～(11)』(1949年1月～1951年4月)、『農業統計研究資料(12)～(22)』(1951年5月～1959年9月)以外の「著作目録」未記載の1950年代の文献を、以下列挙する²⁰⁾。

「農業統計研究部概況」(『昭和二十三年度研究部業務報告書』統計研究会、1949年5月)。

「農業統計部会」(『昭和二十四年度研究部業務報告書』統計研究会、1950年4月)。

「日本農業統計体系の研究並に日本農業における限界生産規模及び生産費の統計的研究」(『昭和二十五年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1950年度)。

「農業統計研究部会」(『昭和二十五年 研究部業務報告書』統計研究会、1951年5月)。

「農産物価格の統計的研究」(『昭和二十六年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1951年度)。

「農業統計研究部会」(『昭和二十六年 研究部業務報告書』統計研究会、1952年5月)。

「農産物価格変動要因に関する統計的研究」(『昭和二十七年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1952年度)。

「農業統計研究部会」(『昭和二十七年 研究部業務報告書』統計研究会、1953年6月)。

「農業統計研究部会」(『昭和二十八年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1953年度)。

「財団法人 統計研究会昭和29年度研究計画書 V. 農業統計研究部会」(『統計情報』行政管理庁統計基準部、1954年5月)。

「農業統計研究部会」(『昭和二十八年 研究部業務報告書』統計研究会、1954年6月)。

「長崎県経済統計研究委員会」(『昭和二十八年 研究部業務報告書』統計研究会、1954年6月)。

「農業統計研究部会」(『昭和二十九年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1954年度)。

「農業統計研究部会」(『昭和二十九年 研究部業務報告書』統計研究会、1955年9月)。

「農業統計研究部会」(『昭和三十年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1955年度)。

「農業統計研究部会」(『昭和三十一年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1956年度)。

「農業統計研究部会」(『昭和三十一年 財団法人統計研究会概要』統計研究会、1957年

度)。

「農業統計研究部会」(『統計研究会十年史』統計研究会, 1958年3月)。

なお、宇野が関わっている可能性のある昭和25年度、昭和26年度、昭和27年度、昭和28年度、昭和29年度の謄写版『研究部会議事録集』(統計研究会, 1951年5月, 1952年5月, 1953年5月, 1954年5月, 1955年5月)が発行されている記録があるが、現物の発見に当たっていない。また、昭和22年度の『研究業務報告書』(統計研究会, 1948年5月)についても現物未確認である。

■社会科学研究所

1946年8月に設立された東京帝国大学社会科学研究所では、翌年から民主主義研究特別委員会による共同研究が開始された²¹⁾。宇野はこの委員会の副委員長として、研究部会である第二部「日本に於ける資本主義の発展と民主主義」の主任を、また第三部「転換期に於ける行政機構の民主主義化の問題、とくに各種委員会の実態調査」に参加している。

このうち第三部の成果は、東京大学社会科学研究所編『行政委員会——理論・歴史・実態』(日本評論社, 1951年5月)にまとめられている。宇野は、「農地委員会(その二)」(45-67頁)に、調査の立案および取纏めの方針を示す役割で参加している。

このほか、代表的な社研での宇野の研究成果に、「長野県西筑摩郡王滝村調査報告」(『社会科学研究』東京大学社会科学協会, 第3巻第2号, 1951年12月)²²⁾、宇野弘蔵監修・東京大学社会科学研究所編『林業経営と林業労働』(農林統計協会, 1954年4月)、『地租改正の研究(上・下)』(東京大学出版会, 1957年8月・1958年4月)などがあげられる²³⁾。これ以外の、社研に関連する宇野のクレジットが残る研究は、以下のとおりである。

「安定経済下の農村経済の変貌」(『昭和二十六年学校研究所等 農業経済関係調査研究計画概要(第三集)』農林省農業改良局研究部(経済), 1951年11月)は、東大社研での昭和25・26年の研究計画の概要を示したものである。調査研究の目的は、「安定経済」下における日本農村の人口移動、租税負担、金融の状態等につき実態調査をなし、所謂「安定経済」の実相を明らかにすること」と記されている(102頁)。宇野は「担当主任者」としてクレジットされている。

東京大学社会科学研究所編『戦後宅地住宅の実態』〈宅地住宅総合研究1〉(東京大学出版会, 1952年6月)²⁴⁾は、1948年秋の建設省の宅地問題の総合的研究にたいする要請から始まり、1949年度～1951年度にかけて実施された調査研究の成果である。調査は「東京大学宅地住宅総合研究会」の研究者と、昭和25年度の文部省の科学研究費の補助をうけた総合研究「宅地および住宅問題の総合研究」の参加者によっておこなわれた。宇野は前者の研究會に責任者として参加しており、本書では「はしがき」(i頁)を執筆している。

■各種辞典

高島善哉・古在由重・高桑純夫・中村元編『世界思想辞典』（河出書房，1950年11月）は、古今東西のさまざまな思想を網羅する辞典である。宇野は「執筆者」としてクレジットされているが、どの項目を執筆しているのかは明記されていない。他の執筆者として、大内力、大島清、岡崎次郎、向坂逸郎、杉本栄一、鈴木鴻一郎、野々村一雄、平田清明、水田洋などの名が記されている。

大阪市立大学経済研究所編『経済学小辞典』（岩波書店，1951年6月、増訂版，1956年4月）には、宇野の執筆による「資本（その二）」、「資本の回転」、「資本の転形（変態）」の項目が掲載されている。執筆のほか、宇野は初版、増訂版ともに「編集委員」としてクレジットされている。他の編集委員に、上林貞治郎、藤田敬三、山田盛太郎などがクレジットされている。

中山伊知郎編集委員代表『経済学大辞典』（東洋経済新報社，第I・II・III巻，1955年6月・9月・12月）の第III巻には、宇野の執筆による「マルクス学派」の項目がある。また宇野は、当該大辞典の全巻に「編集委員」として関わっている。他の編集委員は、赤松要、大河内一男などである。

このほか、出版されたものではないため例外となるが、1961年6月に出版の久留間鮫造・宇野弘蔵・岡崎次郎・大島清・杉本俊朗編集『資本論辞典』（青木書店）²⁵⁾に先立って、1957年7月付で執筆者らに編者連名で送られた執筆依頼文「『資本論辞典』の編集に当って」が残されている²⁶⁾。参照の便宜のため、全文引用しておく。

「『資本論』が経済学の偉大な古典的著作であることは、あらためていうまでもないことです。この著作の入門書や解説書の類はこれまでも多く書かれておりますが、マルクスがこの著作の中で使った諸概念の厳密な規定を内容とした辞典は、日本はもとより外国にも全くありません。そういう辞典があれば、『資本論』の研究上はもちろん、『資本論』によるマルクス主義の書物を理解する上にも、きわめて便利であると思われまます。さらにまた、概念規定の不明確から生ずる『資本論』の誤解や理論的混乱をふせぎ、その学問的成果を摂取し発展させる上に大きな貢献をなしうるものと信じます。

われわれはこの数年来、『資本論辞典』編集の準備をしてきたが、このたび、青木書店がその刊行をひきうけることになったので、いよいよその実現を図ることに致しました。これは相当な努力を要する困難な事業であり、これを完成させるためには長年『資本論』の研究にたずさわってこられた学界諸氏の協力にまつほかありません。本辞典のため、なにとぞ力をおかし下さらんことをお願いする次第です」（頁数未記載）。

■経済学全集

1954年12月から刊行が始まった『経済学全集』（弘文堂）は、東京大学経済学部の主要

講義を公開することを目的に企画されたものである。当初は全 16 巻・別巻 1 冊の刊行が予定されていたが、山田盛太郎『第 1 巻 経済学総論』、木村健康『第 2 巻 近代経済学』、相原茂『第 10 巻 工業経済論』、脇村義太郎『第 12 巻 労働問題』、東畑精一『第 13 巻 日本農政学』の 5 冊および『別巻 経済学小辞典』は未刊行である。宇野は刊行された以下の文献に「編集」という立場関わっている。

宇野弘蔵『経済政策論』〈経済学全集 IX〉(弘文堂, 1954 年 12 月)。

大河内一男『労働問題』〈経済学全集 XI〉(弘文堂, 1955 年 1 月)。

土屋喬雄『日本経済史』〈経済学全集 VI〉(弘文堂, 1955 年 2 月)。

鈴木鴻一郎『マルクス経済学』〈経済学全集 IV〉(弘文堂, 1955 年 3 月)。

大内兵衛・武田隆夫『財政学』〈経済学全集 XIV〉(弘文堂, 1955 年 7 月)。

舞出長五郎・横山正彦『経済学史』〈経済学全集 V〉(弘文堂, 1955 年 9 月)。

矢内原忠雄・楊井克己『国際経済論』〈経済学全集 VIII〉(弘文堂, 1955 年 12 月)。

鈴木武雄『金融論』〈経済学全集 XV〉(弘文堂, 1956 年 1 月)。

有沢広巳・内藤勝『統計学』〈経済学全集 XVI〉(弘文堂, 1956 年 11 月)。

大塚久雄『欧州経済史』〈経済学全集 VII〉(弘文堂, 1956 年 11 月)。

古谷弘『現代経済学——生産分析』〈経済学全集 III〉(弘文堂, 1957 年 9 月)。

鈴木鴻一郎『続マルクス経済学』〈経済学全集 XVII〉(弘文堂, 1959 年 6 月)。

また、『経済学全集』については「内容見本」(弘文堂, 1954 年 11 月)が発行されており、有沢広巳・宇野弘蔵・山田盛太郎・脇村義太郎の連名による「刊行のことば」が掲載されているほか²⁷⁾、「執筆者の抱負」として宇野が『経済政策論』についての短文を書き残している²⁸⁾。以下、後者の短文を全文引用しておく。

「経済政策の科学的研究は、常識的に考えられるように、科学的な経済政策の樹立を目標とするものではない。むしろ反対に資本主義の発展に伴って変化して来た諸政策の客観的根拠を明らかにすることによって、資本主義発展の世界史的段階を規定することに役立つべきものである。これによってまた吾々は日本のような後進国の政策の特殊性を明らかにし、その経済的構造とその変化の動向とを究明する、経済学の窮極の目標達成に貢献することができるのである」(5 頁)。

■その他の 1950 年代の文献

「河上肇を語る」(『書物』美松書房, 第 1 号, 1950 年 5 月)は、『書物』という雑誌の創刊号に掲載された座談会の記録であり、宇野のほか、大内兵衛、宇佐美誠次郎ら 6 名が参加している。大内の話から唐突に始まっているため座談会の企画の意図がタイトル以上にはわからない。大内の発言に紙面の多くを割いているため宇野による河上評はあまりみられない。

「弔辞」（『嘉信』嘉信社，第14巻第30号，1951年3月）は夭逝した経済学者，藤井洋（1914-1951）にむけた文章である。宇野は藤井とは三菱経済研究所および東大社研において交流している。降旗節雄の編集による宇野と藤井の共著『現代資本主義の原型』（こぶし書房，1997年12月）がのちに出版されている²⁹。

「往復書簡 自由に読み利用すること」（『法政』法政大学，第1巻第3号，1952年7月）は，中野正からの「先生は『資本論』をどういう風に読んでみえたか，なんとなくで結構ですからお話し下されれば幸甚です」との便りにたいする返信である。「恐慌論」の執筆や東北帝国大学時代の話につづけて，宇野は，「『資本論』は御自由に読むこと，自由に利用すること，ただそれだけです」と答えている（10-12頁）。

「私と文学」（『文学』岩波書店，第22巻第1号，1954年1月）は，宇野の小説についての読書遍歴などが4頁にわたって記されたエッセイである。「小説はどうも私にとっては仲々棄てることのできないものではあるが，正體のわからないものようである」（106頁）と締めくくられている。

有沢広巳編『日本の生活水準』（東京大学出版会，1954年7月）は，「序」によれば，「第十二回太平洋問題調査会国際会議における討議の基礎資料をつくるために，日本の生活水準の問題をテーマとして行った調査研究の成果」とある（1頁）。この調査研究を実施するうえで設けられたのが「生活水準研究小委員会」であり，宇野は執筆にはたずさわっていないものの，この委員会の「メンバー」としてクレジットされている。なお，「序」を執筆している日本太平洋問題調査会調査委員長は矢内原忠雄，生活水準研究小委員会の委員長は大内兵衛，その他メンバーに有沢広巳，大内力，杉本栄一，都留重人，富永祐治などの名が記されている。

「『マルクスと農民』」（東畑精一・盛永俊太郎監修・農業発達史調査会編『日本農業発達史第十巻——明治以降における』中央公論社，日本農業発達史の葉No.10，1958年1月）は，ミトラニイ『マルクスと農民——社会発展に関する前提の研究』（法政大学出版局，1956年3月）にたいする宇野の批評が記された短文である。原理論と現状分析の関連がおもに論じられている³⁰。

「農民運動史の基礎資料整備編纂並に農民運動の社会経済的諸影響に関する研究」（『昭和30年度 農林水産業応用試験研究 概要報告書』農林水産技術会議，1958年5月）について。これは，昭和30年度農林省の農林漁業技術試験費補助金によっておこなわれた試験研究の概要を示す報告書である。大島清，一柳茂次，遊上孝一との4名での共同研究であり，昭和28年度～昭和30年度にかけて原資料の整備ならびに13府県の実態調査をおこなっている。文献の編纂がなされているようであるが，これが公に発表されているのかは不明であるものの，ここでの農民運動研究の成果はその内容を見る限り，東畑精一・宇野弘蔵編『日本資本主義と農業』（岩波書店，1959年7月）につながっているといえよう。

【1960 年代の著作】

1960 年代においても宇野の執筆スピードは衰えることなく、『経済学方法論』（東京大学出版会，1962 年 2 月）³¹⁾ や『経済原論』（岩波全書，1964 年 5 月）³²⁾ といった代表作をものにしたほか、『社会科学の根本問題』（青木書店，1966 年 9 月），『資本論研究』（全 5 冊，筑摩書房，1968 年 4 月完結），『経済学を語る』（東京大学出版会，1967 年 9 月），『社会科学としての経済学』（筑摩書房，1969 年 5 月），『マルクス経済学の諸問題』（岩波書店，1969 年 10 月），『資本論の経済学』（岩波新書，1969 年 11 月）などの重要文献をつぎつぎと発表していった。この間，1968 年 3 月には法政大学を定年により辞し，のち同年 4 月には同大学大学院社会科学研究所講師（1969 年 3 月まで），同年 6 月には立正大学経済研究所嘱託を務めている（1972 年 3 月まで）³³⁾。

■統計研究会

1960 年代の統計研究会関連の「著作目録」未記載の文献は，以下のものに限られる。いずれも宇野は，農業統計研究部会の「主査」としてクレジットされている。なお、『事業実績一覧』は昭和 41 年度，昭和 42 年度，昭和 50 年度のみ現物を確認できたが，他の年度のものが発行されているかどうかは，現物も記録もないため不明である。

「米価と生産費に関する調査研究」（『事業実績一覧 昭和 41 年度』統計研究会，1966 年度）。

「集団栽培における米作と米生産費の研究」（『事業実績一覧 昭和 42 年度』統計研究会，1967 年度）。

「農業統計研究部会」（『統計研究会 20 年史』統計研究会，1968 年 3 月）。

■その他の 1960 年代の文献

宇野弘蔵編『経済原論 普及版 (I・II)』〈新経済学演習講座〉（青林書院，1960 年 12 月）は，1955 年 4 月に刊行された宇野弘蔵編『経済原論』〈経済学演習講座〉（青林書院）を二分冊したものであり，その際に「普及版序」が新たに付されている。

「社会科学研究所の十五年」（東京大学社会科学研究所編『社会科学研究所研究』有斐閣，第 15 巻第 1 号，1963 年 8 月）は³⁴⁾，東大社研の創立 15 周年に企画された座談会の記録である。参加者は宇野のほか，南原繁，鶴飼信成，大内兵衛，有泉亨，我妻栄，内田力蔵，高橋幸八郎である。宇野が社研に入った時の経緯などが話されている。

「東京大学社会科学研究所 創立十五周年記念式典記事」（東京大学社会科学研究所編『社会科学研究所研究』有斐閣，第 15 巻第 1 号，1963 年 8 月）には，1963 年 3 月 27 日に举行された東京大学社会科学研究所創立十五周年記念式典での宇野の祝辞の要旨が掲載されている。社

会科学についての宇野の考えが垣間みえる文章であるため、全文引用しておく。

「私自身が研究所にいた時のことを考え、一・二述べたい。内部にいてみると社研は相当難しい問題をもっている。私の考えではあるが、法律学・政治学・経済学というふうに分れて発達してきた学問を、一つところで同じように研究しようというわけであるから、方法上の問題として、どういう方法で結びつくかという難しい問題がでてくる。この点は絶えず問題にしてきたところだ。私が在職した折、ある教授会で、社研の英語名をあらわすのに、Social Science という単数では外国の人々になかなか通じない、複数に直したらどうだという話がでた。これを聞いて私はびっくりして、どうしても単数にしておいて欲しいと主張した。そのまま、現在も単数になっていると思う。これは、やはり意味があると考えている。これまで、法律学・政治学・経済学と分れて来た学問を、社会科学として、統一した一つの学問に連なるような方法を確立する、単に法律・政治・経済の研究を深めるだけでなく、社会科学として統一する研究方法を確立し、それによって、またそれぞれの成果を深めるといって、他の研究所とも学部とも異なった特殊な課題を社研はもっていると考えている。

本日の十五周年記念は、こうした課題に答える一里塚であると考えたい。社会科学としての統一した方法を確立するめどがついてくると、研究の成果もつぎつぎ上ってくると思うので、次には是非十年位で、その次には五年位で記念をやれるように、研究の成果を上げて欲しいと願っている」(142頁)。

「マルクスの方法と社会科学」(『学生学会報——ゼミナール大会報告集』法政大学社会学部学生学会、第4号、1965年1月)は、1964年11月26日におこなわれた法政大学社会学部での講演の記録である。「著作目録」に記載されており、『社会科学としての経済学』(筑摩書房、1969年5月)および『著作集 別巻』に収録もされているが、収録の際、9頁にわたる「質疑応答」(20-28頁)の記録が落とされている。長いため引用は控えるが、7つの質問が出され(うち質問3は未記載)、そのすべてに宇野が回答している。

「資本論五十年」(『朝日新聞(夕刊)』朝日新聞東京本社、第29024号、1966年10月19日)には、宇野の写真とともに短いインタビューが記載されている。「社会科学は、政治の基盤を明らかにする分析が目標なんですから、すぐに政策に使えません」(9頁)といったことなどが述べられている。

『考える人／五つの箱 人間の開放 岩波文庫より』(岩波文庫創刊40年 1927-67)(岩波書店、1967年6月)は、岩波文庫創刊40年を機に企画された岩波文庫のボックスセットである。宇野は「選者」としてクレジットされており、「人間の解放」をテーマに中野重治、松田道雄とともに17冊の文庫を選んでいる。経済学関連のものとしては、『共産党宣言』、『賃労働と資本』、『空想より科学へ』、『貧乏物語』があげられている。なお、このボックスセットのほかに、小冊子『考える人——五つの箱 岩波文庫より』(岩波書店、1968年7月)が発行されている。

「初版『資本論』を持っています——刊行 100 年によせて」（『アサヒグラフ』朝日新聞社、通巻 2279 号、1967 年 11 月）は、『資本論』第 1 巻の初版本を所有する 10 名へのインタビューの記録である。宇野のほか、向坂逸郎、長谷部文雄、森戸辰男、有沢広巳、大塚金之助、鈴木鴻一郎、森恒夫らが所有の経緯などについてインタビューを受けている。宇野の発言について、全文引用しておく。

「ぼくのは自分でさがして買ったのではなく、おやじにもらったものですから自慢にはならないのですがね。

家内の父（故高野岩三郎＝元大原社会問題研究所長）が、昭和のはじめ、洋行のみやげにドイツから買ってきてくれたのです。初版はすでに読んでいたし、あまり興味がなく、父にもたいしてお礼をいわなかった。

父の死後、有沢広巳君から、当時父が苦心してこの本をさがしたようすをきいて、悪いことをしたと思ったですよ。もっと礼をいっとけば、と心残りだね。

青木書店からそっくり同じリプリントが出ているし、家では普通の本と同じようにあつかっています」（84 頁）。

宇野弘蔵編『資本論研究』（全 5 巻、筑摩書房、1968 年 4 月完結）は『著作集』に未収録であるが、このほかに、『『資本論研究』発刊の辞』というタイトルの短文が残されている。これが記載されている文章はこれまで 2 種類見つかっており、ひとつは、『展望』（筑摩書房、第 109 号、1968 年 1 月）に掲載の『資本論研究』の広告であり、またひとつは、筑波大学附属図書館「宇野文庫」に所蔵されている「[宇野弘蔵旧蔵抜刷]、[5]」³⁵⁾の一部として収められている。「発刊の辞」については両資料に同じ文章が記載されているが、後者の資料には、ほかに重複する文献があるのかは定かではないが、「『資本論』研究の現代における意義」という文章が別に掲載されている。以下、「発刊の辞」のみ引用しておこう。

「ことは『資本論』第一巻の発刊百年にあたっている。もちろんわれわれ研究者にとっては、百年も九十九年も別に変わりがあるわけではない。しかし何といても『資本論』は、経済学の基本的概念を確立したばかりでなく、資本主義社会の本質的規定を興えることによって、人類社会の歴史に対する科学的解明の道を開いた著作であって、われわれはこの機会に、この偉大なる著者に心からの敬意を表することのできるのを、この上ない喜びとするものである。

しかしながらまた、そういう『資本論』であればこそわれわれは、その難点には触れないで、ただたんに通俗的解説を繰り返すことはしたくない。疑問とするところは明確に疑問として、その解決に努めることを怠ってはならないものと考えている。マルクス自身も、『資本論』の序文で、科学的批判ならばあらゆる判断を歓迎するといっている。われわれは『資本論』の科学的傳統をつぐことを念願とするものである。また、かくして始めて『資本論』を現代に生かすこともできるわけである。

宇野弘蔵に関する新資料の解説

この『研究』の解説、問題点の執筆者は、わたくしが東京大学在職中に大学院でゼミナールに参加した諸君である。その後十年、わたくしは久しぶりにこれらの諸君とともに、『資本論』全三巻にわたる諸問題を討論することになった。もちろん『資本論』の難問を解決したなどとはいわないが、自由活発なる発言は、問題の解明に大いに役立ち、『資本論』を学ぶ者に参考となることが少なくないと思うのである」(頁数未記載)。

「利子論〔最終講義〕」(『社会労働研究』法政大学社会学部学会、第14巻第4号、1968年3月)は、タイトルにあるように、1968年1月18日におこなわれた法政大学における最終講義の記録である。『著作集 第五巻』にのみ収録されているが、収録の際、後半の約10頁程度の質疑応答部分が落とされている。

【1970年代の著作】

晩年の1970年代には、宇野段階論の決定版となる『経済政策論 改訂版』(弘文堂、1971年2月)が著されたほか³⁶⁾、『経済学の効用』(東京大学出版会、1972年2月)や『資本論に学ぶ』(東京大学出版会、1975年9月)、また宇野理論の集大成となる『宇野弘蔵著作集』(全10巻・別巻1、岩波書店、1974年8月完結)の出版も果たされた³⁷⁾ ³⁸⁾。著書の出版がつづく一方、1972年5月21日に宇野は脳梗塞で倒れ、以後病臥生活をおくることになった。生前最後の著書(梅本克己との共著)となる『社会科学と弁証法』(岩波書店、1976年1月)の出版の翌年1977年2月22日午前10時20分、藤沢市鶴沼の自宅で死去。享年79歳。3月2日に葬儀がおこなわれたのち³⁹⁾、鎌倉市の極楽寺に葬られている。

■統計研究会

宇野は亡くなるまで、統計研究会の農業統計研究部会に参加していた。以下は、『著作集』の出版以降に発行された農業統計研究部会の資料であり、宇野はすべての文献に「農業統計研究部会委員長」としてクレジットされている。なお、宇野の死後、大島清による宇野への哀悼の意が、『インフレーションと農産物価格——食糧庁昭和50年度委託調査報告書』〈農業統計研究資料(41)〉(統計研究会、1977年3月)の「はしがき」に記されている。

『米の生産調整と兼業化問題——食糧庁昭和47年度委託調査報告書』〈農業統計研究資料(37)〉(統計研究会、1973年3月)。

『米の生産調整と日本農業——食糧庁昭和48年度委託調査報告書』〈農業統計研究資料(38)〉(統計研究会、1974年3月)。

『70年代シエーレの研究——農産物価格と工産物価格——食糧庁昭和49年度委託調査報告書』〈農業統計研究資料(39)〉(統計研究会、1975年3月)。

「農産物価格と農家購入品価格との変動的相関関係に関する研究」(『事業実績一覧 昭和

50 年度』統計研究会, 1975 年度)。

『農産物価格と農家購入品価格との変動的相関関係に関する研究——食糧庁昭和 50 年度委託調査報告書』〈農業統計研究資料 (40)〉(統計研究会, 1976 年 3 月)。

■絶筆

宇野の絶筆として考えられる文献はふたつある。ひとつは、『『資本論』と私』(御茶の水書房, 2008 年 1 月)に収録された、『『資本論』と私』(『社会科学のために』時潮社, 1976 年春季号, 1976 年 4 月)である⁴⁰⁾。

またひとつは、このほど発見がなかった、「特異な存在であった梅本君」(梅本克己著作集編集委員会編・解題『梅本克己著作集 全十巻』三一書房, 内容見本, 1976 年)である⁴¹⁾。これは『梅本克己著作集』の「内容見本」に掲載された文章であり、宇野のほか野間宏、大井正もコメントを寄せている。入手困難な文献であるため、以下、全文引用しておく。

「梅本君とは、わたしの弟子の一人がわたしの「経済原論」を彼に解説したことがきっかけで知り合いました。その後いろいろ議論もしましたが、大変熱心な人だったという印象がつよくのこっています。

梅本君の功績といえば、マルクス主義の哲学、それも主に人間論的な方面を明らかにしたことだと思います。マルクスじしんも経済学は後から研究したので、最後まで哲学的なものをのこしていたわけですが、梅本君は一貫してそれを現代的観点から追求し、一つの思想体系にまでまとめあげようとしたのでした。はじめ倫理的な主体性論者として出発しながら、徐々に政治学や経済学など社会科学にまで研究をすすめる、それらとの関連でマルクス主義の哲学をまとめようとしたわけで、日本のマルクス主義者としては特異な存在だったといえるでしょう。今度、その全成果が著作集として刊行されるそうで、多くの読者とともに期待しているところです」(頁数未記載)。

注

* 本研究は JSPS 科研費 JP22K13371 の助成を受けたものである。

† 宇野弘蔵の新資料の収集にあたって、蔭川亮太氏、清原文氏、久世泰子氏、櫻井毅氏、杉本伸代氏に大変お世話になった(五十音順)。ここに記して感謝を申し上げる。

1) 『著作集』別巻の「著作目録」に未記載であっても、宇野弘蔵『資本論に学ぶ』(UP 選書)(東京大学出版会, 1975 年 9 月)、宇野弘蔵著・櫻井毅解説『『資本論』と私』(御茶の水書房, 2008 年 1 月)に収録されている文献については本稿では対象としない。また、宇野没後の文献についても、本稿では基本的に対象としない。

2) 前稿においてふれていない 1940 年代の新資料について解説をくわえておきたい。

「歴史はくりかえす」(『真相』人民社, 第 4 巻第 12 号, 1949 年 12 月)には、学問の自由をめぐる大学の問題についての宇野のコメントが掲載されている。コメントは一言、「現在の識

宇野弘蔵に関する新資料の解説

首は単なる行政整理と考える」(41頁)と書かれている。

服部文男「宇野弘蔵語録・大塚久雄語録・高橋幸八郎語録・山田盛太郎語録」(『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』マルクス・エンゲルス研究者の会、第51号、2009年9月)は、宇野が1949年11月29日～12月6日および1950年12月15日～22日の期間に東北大学にて経済原論特殊講義をおこなった際に、服部が見聞きしたメモである。断片的な記述ではあるが、都留重人の著作への言及などが記されている。

- 3) 『社会科学研究所の30年——年表・座談会・資料』(東京大学社会科学研究所、1977年3月)5頁。
- 4) 『官報』(大蔵省印刷局、第6753号、1949年7月19日)には、1949年6月13日付で「東京大学社会科学研究所長に補する」と記されている(207頁)。他方、『東京大学百年史 部局史4』(東京大学出版会、1987年3月)には、宇野の所長期間は1949年7月1日からと記載されている(382頁)。なお、『社会科学研究所の30年——年表・座談会・資料』(東京大学社会科学研究所、1977年3月)の年表には、1949年6月13日に「矢内原忠雄所長辞任のため最初の所長選挙(助手をのぞく)、宇野弘蔵選出」、同年6月30日に「〔所長〕宇野弘蔵」と記載されている(8頁)。
- 5) 『経済原論』の広告・紹介については、『世界』(岩波書店、第61号、1951年1月)頁数未記載、『図書』(岩波書店、第30号、1952年3月)24頁、『学鏡』(丸善雄松堂出版、第49巻第4号、1952年4月)54頁、『中央公論』(中央公論社、第67年第11号、1952年10月)272頁、林健久「経済原論」(『世界名著大事典2』平凡社、1960年4月)210頁。

『経済原論』の書評については、岡崎三郎「商品としての労働力——宇野弘蔵氏著『経済原論』について」(『図書』岩波書店、第18号、1951年3月)19-20頁、武市健人「宇野弘蔵著『経済原論 上』」(『出版ニュース』出版ニュース社、第156号、1951年3月)6頁、山川均「宇野弘蔵著『経済原論 上・下』」(『出版ニュース』出版ニュース社、第197号、1952年5月)17頁、遊部久蔵「宇野弘蔵著『経済原論 上・下』」(『思想』岩波書店、第337号、1952年7月)89-94頁、土屋清「経済原論 宇野弘蔵著」(『何を読むべきか 第2集』社会思想研究会、1954年2月)38頁。

なお、『経済原論(上・下)』は、1952年度毎日出版文化賞の審査委員会の推薦図書にあげられている。『読書世論調査——第6回 1952年度調査』(毎日新聞社、1953年3月)94-96頁。

- 6) 『官報』(大蔵省印刷局、第8419号、1955年1月27日)に学位授与の記録が掲載されている(352頁)。
- 7) 『恐慌論』の広告については、『図書』(岩波書店、第48号、1953年9月)26頁、『現代の理論』(現代の理論社、第149号、1976年6月)頁数未記載。
- 8) 宇野は1949年春、1950年5月に名古屋帝国大学にて経済原論の集中講義を実施している。岩田弘が名古屋経済専門学校3年次にこれを聴講している。五味久壽編『岩田弘遺稿集』(批評社、2015年12月)315頁、「戦後経済学会の成果と課題」(『経済評論』日本評論社、第5巻第12号、1950年12月)38頁。
- 9) 1950年度に、宇野は東京大学経済学部において経済政策論の講義を担当している。『東京大学百年史 部局史 1』(東京大学出版会、1981年3月)1073頁。
- 10) 1954年の秋から数年間、宇野は杉本栄一の後任として、一橋大学において経済学特殊講義を

- 担当しており、関根友彦や佐藤金三郎、高須賀義博らが聴講している。関根友彦『私が学んできた経済学——新古典派理論から宇野理論へ』（社会評論社、2024年1月）第1章、宇野弘蔵『経済学を語る』〈UP選書〉（東京大学出版会、1967年9月）60頁。
- 11) 所長の辞任についての記載は、『官報』（大蔵省印刷局、第3912号、1925年9月7日）159頁、『社会科学研究所の30年——年表・座談会・資料』（東京大学社会科学研究所、1977年3月）9-10頁、『東京大学百年史 部局史 4』（東京大学出版会、1987年3月）392-393頁。
 - 12) 宇野は1951年6月に最初の任期満了となったが、投票の結果再選（6月11日）、その半年後に研究所のあり方をめぐって辞意を表明（12月3日）、人事委員会が12月17日にこの辞意表明を承認している。12月24日の所員会において、宇野は所長辞任についてつぎのように述べている。「辞任の理由としては漠然としたものであるが、私は研究所の行き方について非常に強い意見を持っている。（略）経済学は社会科学に対して或る確固たる基礎が与えられているが、法律、政治にはまだそれがない。その基礎を確立することが社研の任務である」と。1952年1月31日、宇野は所長を辞任するにいたっている。『東京大学百年史 部局史 4』（東京大学出版会、1987年3月）392-393頁。
 - 13) 『社会科学研究所の30年——年表・座談会・資料』（東京大学社会科学研究所、1977年3月）132頁、『東京大学百年史 部局史 4』（東京大学出版会、1987年3月）397頁。
 - 14) 『東京大学百年史 部局史 4』（東京大学出版会、1987年3月）414頁。
 - 15) 1946年に宇野は法政大学にて兼任講師を務めている。栢野晴夫「宇野弘蔵教授最終講義における挨拶」（『社会労働研究』法政大学社会学部学会、第14巻第4号、1968年3月）180頁。
 - 16) 宇野の法政大学時代については、宇野弘蔵『資本論五十年（下）』（法政大学出版局、1973年10月）第19章。
 - 17) 『昭和二十三年度研究部業務報告書』（統計研究会、1949年5月）17-19頁。
 - 18) 『『日本農業構造の統計的分析』要綱とその問題点』〈農業統計研究部会資料（五）〉（統計研究会、1949年9月）。
 - 19) 『統計研究会20年史』（統計研究会、1968年3月）x-xi頁。
 - 20) 統計研究会の刊行資料目録は、『昭和三十二年度 財団法人統計研究会概要』（統計研究会、1957年度）に掲載されている。
 - 21) 社研での共同研究については、『社会科学研究所の30年——年表・座談会・資料』（東京大学社会科学研究所、1977年3月）113-125頁、『東京大学百年史 部局史 4』（東京大学出版会、1987年3月）386-389頁。
 - 22) のちに、宇野弘蔵編『日本農村経済の実態——安定経済下における』（東京大学社会科学研究所研究報告 第十二集）（東京大学出版会、1961年2月）に収録の際、初出稿の冒頭の宇野の執筆部分は削除されている。
 - 23) このほかに宇野は、1959年度～1963年度にかけておこなわれた共同研究「近代財政金融制度の成立」（代表者は加藤俊彦）にも「明治史研究会」のメンバーとして参加している。『社会科学研究所の30年——年表・座談会・資料』（東京大学社会科学研究所、1977年3月）118頁、加藤俊彦・大内力編著『国立銀行の研究』（東京大学社会科学研究所研究叢書 第二一冊）（勁草書房、1963年7月）1頁。
 - 24) この研究の経緯については、『都心地における宅地住宅の変遷——東京都台東区竹町の場合』（東京大学社会科学研究所 調査報告第9集）（東京大学社会科学研究所、1968年1月）3-4頁。

宇野弘蔵に関する新資料の解説

- 25) 本辞典は、のちに中国語版が刊行されている。久留間鮫造・宇野弘蔵等編、薛敬孝・李樹果・王健宜译『資本論辞典』（南开大学出版社、1989年12月）。
- 26) 筆者はこれを東北大学附属図書館「斎藤晴造文庫」で発見した。所蔵資料のタイトルは「〔原稿〕：〔資本論辞典〕／〔斎藤晴造著〕」，資料番号は「00150082184」，請求記号は「DA/012」。なお、この執筆依頼文には、青木書店による執筆要領が付されている。
- 27) 「刊行のことば」は「内容見本」に記載されているほか、同じ文章が別の媒体にも掲載されている。「『経済学全集』刊行のことば」（『Books』Booksの会、第55号、1954年11月）15-16頁、「『経済学全集』」（『Books』Booksの会、第69号、1956年1月）19-20頁。
- 28) 同じ短文はつぎの文献にも記載されている。「『経済政策論』経済学全集第九巻」（『Books』Booksの会、第56号、1954年12月）15頁。
- 29) 宇野と藤井の関係については、宇野弘蔵『資本論五十年（下）』（法政大学出版局、1973年10月）611-617頁、宇野弘蔵・藤井洋著・降旗節雄編『現代資本主義の原型』（こぶし書房、1997年12月）収録の「解説」、大内力「宇野弘蔵と藤井洋」（『場』こぶし書房、No.11、1997年12月）3-4頁。
- 30) 宇野によるミトラニイにたいする他の言及は、宇野弘蔵『経済学を語る』（UP選書）（東京大学出版会、1967年9月）235-236頁。
- 31) 『経済学方法論』の広告・紹介については、『経済セミナー』（日本評論社、第67号、1962年3月）頁数未記載、『思想』（岩波書店、第453号、1962年3月）頁数未記載、『経済セミナー』（日本評論社、第71号、1962年7月）77頁、日高普「宇野弘蔵著『経済学方法論』」（『経済評論』日本評論社、復刊第11巻第9号、1962年9月）136-139頁。
- 32) 『経済原論』（岩波全書）の広告については、『思想』（岩波書店、第479号、1964年5月）vi頁、『経済セミナー』（日本評論社、第96号、1964年6月）頁数未記載。
- 33) 立正大学に勤務する経緯については、永谷清「資本論五十四年」（宇野マリア編『思い草』非売品、1979年2月）212-216頁。
- 34) この座談会は、『社会科学研究所の30年——年表・座談会・資料』（東京大学社会科学研究所、1977年3月）に再録されている。
- 35) 筑波大学附属図書館に記載の資料IDは「11296012504」，請求記号は「宇野文庫-S-12」。
- 36) 『経済政策論 改訂版』の広告については、『朝日ジャーナル』（朝日新聞社、第13巻第10号、1971年3月）97頁。
- 37) 『宇野弘蔵著作集』の広告・紹介については、『図書』（岩波書店、第281号、1973年1月）20頁、『図書』（岩波書店、第289号、1973年9月）7,64頁、『サンデー毎日』（毎日新聞出版、第52巻第40号、1973年9月）126頁、『図書』（岩波書店、第290号、1973年10月）4-5頁、『朝日ジャーナル』（朝日新聞社、第15巻第42号、1973年10月）110頁、『図書』（岩波書店、第291号、1973年11月）5頁、『学鏡』（丸善雄松堂出版、第70巻第11号、1973年11月）83頁。
- 38) 『宇野弘蔵著作集』には「内容見本」が存在する。表紙、裏表紙を含めて全12頁であり、岩波書店による「刊行のことば」、「本著作集の特色」、「全十巻 別巻一の内容」や写真が掲載されているほか、大内兵衛、都留重人、美濃部亮吉、梅本克己、野上彌生子の文章が記載されている。

このほか、詳細はわからないが、岩波書店発行の“IWANAMI SHOTEN, Publishers FOR-

EIGN RIGHTS NEWS” という全 4 頁のペーパーに、英文による『宇野弘蔵著作集』の紹介が記載されている（筑波大学附属図書館「宇野文庫」に所蔵）。

- 39) 葬儀については、「宇野弘蔵葬儀次第」、葬儀の様子の音源および記録写真が筆者のもとに保管されている。葬儀は、東京信濃町・千日谷会堂でとりおこなわれた。葬儀では、司会を山口重克、故人履歴・業績紹介を戸原四郎、式辞を小町谷操三、弔電披露を渡辺寛が務めたほか、弔辞を田中菊治（東北大学経済学部長）、岡田与好（東京大学社会科学研究所長）、江村稔（東京大学大学院経済学研究科委員長）、中村哲（法政大学総長）、高橋長太郎（統計研究会監事）、中村吉治（友人代表）、斎藤晴造（門下生代表）、櫻井毅（門下生代表）が読んでいる。
- 40) 「『資本論』と私」の執筆については、宇野弘蔵著・櫻井毅解説『『資本論』と私』（御茶の水書房、2008 年 1 月）370-371 頁。
- 41) 「『資本論』と私」の末尾には、「一九七六年三月二九日」の日付が記されている。他方、『梅本克己著作集』の刊行にむけての書簡や編集委員会記録を保存している一般財団法人日本鉄道福祉事業協会労働資料館に、北星学園大学図書館の蔭川亮太氏をつうじて「内容見本」について問い合わせたところ、「梅本克己氏の夫人宛に「リーフレットが出来上がったので送付する」旨が記載された書簡（1976 年 12 月 15 日付）が見つかった」との回答を得た。もっとも、これだけではふたつの文献のどちらが絶筆であるかを判断することはできない。